

## PCPの種類及び使用法とイネモンガレ病並びに他の病害との関係

岩 田 和 夫

(農林省北陸農業試験場)

PCP水和剤及び粒剤・PCP尿素などを供試して、散布時期(代掻後・活着後・穂肥時)及び散布量(10a当り成分量0.5, 1.0, 1.5kg)並びに落水程度(完全落水・浅水・湛水)を変えて田面に散布し、2・3の病害に対する防除効果、葉害、殺草効果などとの関係を検討した。モンガレ病との関係では、圃場で発病の経過を調査した結果、PCP散布区は顕著に発病が抑制されたがそのうち粒剤区、湛水散布区、少量散布区、代掻後散布区などは多少劣った。また収穫期に調査した被害度では、水和剤と粒剤、散布量、散布時期、落水程度などによる差はあまりみられなかつたが、防除効果は明らかに認められた。しかしモンゼット2500倍葉面散布区に比較するとわずかに劣った。なおポットで殺菌核効果を比較した試験でも明確にその効果が認められ、粉剤及びPCP尿素区、湛水散布区、少量散布区などが多少劣った点

圃場試験で発病の経過を調査した結果と一致した。シヨウリュウキンカク病との関係では、水銀剤よりやや劣つたがPCP散布区もかなりの防除効果が認められた。またアミハン病に対しても明らかに防除効果が認められ、特に活着後に散布したものが優れていた。しかしこれら両病害については、今後殺菌機構の究明と同時に散布時期、方法など更に検討しなければならない問題も多い。殺草効果では、散布量により多少変動がみられたがその効果は明確であつた。葉害については、代掻後に散布したもののうち多量散布区のみに一時的な生育阻害がみられたが、収穫期頃にはその影響は全くみられなかつた。なお茎葉に直接触れないように散布すれば、穂肥時散布、湛水散布したものが、またPCP尿素は水和剤及び粒剤より害作用が少ない傾向が認められた。

## リンゴ園におけるアブラゼミの消長と忌避剤の効果

石 崎 久 次・川 瀬 英 爾

(石川県農事試験場)

金沢市額谷町のリンゴ園において1959~60年にかけて、アブラゼミの羽化状況と加害消長を調べ同時に殺虫剤と忌避剤を用いて防除試験を行つた。結果は次の如くである。

1 老熟幼虫が羽化するために土中から這出して来る孔の数を時期的に見ると、リンゴ園では7月10日頃から成虫が発生し7月30日が最盛で9月13日まで羽化が続いた。

2 幹における産卵密度の消長を見ると、産卵は概しておそく8月6日から始まりその最盛は8月22日、終期は9月15日であつた。また果実では8月11日頃から産卵と吸汁が同時に行われ8月28日頃が最も多く、除袋

(9月1日)後は吸汁痕だけが増加し9月10日までつづいた。この期間は品種によつても多少差が認められた。

3 幹に産卵するのを防ぐには、産卵初期と最盛期にネオキヒコート(2)を2回塗布すると効果が高い。

4 袋掛による被害果防止ではロー紙が良いが、新聞紙やパラフィン紙では被害が多くである。この場合RF-27(忌避剤)を産卵初期から7日毎に3回散くと被害果防止効果が高かつた。また無袋では産卵果が極めて少くなるが、さらにRF-27, デナボン, パイジットを散くと被吸汁果やモモシクイガの被害も同時に防ぐことができた。